

かながわの本

今年、正岡子規生誕150年。子規は、俳句をはじめ日本の近代文学に多大な影響を与えた。俳句が時代を超え、現代の高校生にも親しまれているのは、うれしい。

全国から作品募集をする「神奈川県全国高校生俳句大賞」。19回を数え、若手俳人の「登竜門」として、1万1400通を超える応募があった。応募高校数は210校に上った。その受賞作品を紹介するとともに、選考座談会を掲載している。選考委員には同大名誉教授で、神奈川新聞「俳壇」選者の一人、復本一郎も名を連ねる。

何といっても、高校生の俳句を思う存分、味わえる

研ぎ澄ました若い言葉

のが本書の魅力だ。タイトルも、みずみずしさがあっていい。五七五の17首で表現されるのは、家族、たつた、友人、部活、登下校での出来事、恋愛など、さまざまな。中でも家族を詠んだ句が意外に多く、祖父母や両親のふとしたしぐさに、10代が感じたことを、素直に表現している。

受賞者のひと言には、いろいろと考えさせられる。「一筋の光の美しさをなんとか五七五に結晶化させた」「自分の言いたいことがうまく表現できず、苦しいことも多いのですが、十七首でたくさんのことを伝えられる」

近年、SNSが普及し、若者を中心にコミュニケーションのあり方が変化していた。しかし即座のやりとりでは真意が伝わらず、相手を傷つけてしまうこともある。そんな時代だからこそ、研ぎ澄ました17首で気持ちを表現した俳句が、新鮮に映る。(秋山 理砂)



学校法人神奈川大学
広報委員会 編

(KADOKAWA ☎0570-002301、756円)

「17音の青春

2017

五七五で綴る高校生のメッセージ」